調和しているのか，という問題も分析されなければならないであろう。

しかし，それは教育の直接的利益あるいは促成的効果を期待した場合のことであり，それはそれとして，開発途上にある東南アジア諸国においては重要なことであるが，教育の基本的意義——著者の言葉を借りて言えば，「教育はすべての市民の基本的権利であり，教育を〝消費財〟としてそれ自身のために拡大することが社会的に望ましいという高邁な原理」——も忘れてはならないのではないか。私は，著者の否定する「気楽な主義」（〝消費財〟としての教育を拡大すれば，〝生産財〟としての教育，つまり人的資本への投資も自動的に増大することになり，したがって発展を促進するであろうという考え）をも擁護したい。一見無駄にみえる教育も，何らかの意味で，必ず社会的・経済的発展の基礎となることを確信するからである。

著者は，ラングーン大学元学長で，現在はオックスフォード大学英連邦研究所のスタッフである。この論文は，文章の運びが雑なために，論旨のぼやけているきらいがある。なお，日米フォーラムの1963年8月号(23～34ページ）に岡村忠夫氏の邦訳が載っているが，必ずしも名訳とは言い難い。　（高木英明）

「*mou*: *pan*: *hlwa*」 cau? me khayain myanma sape phyan. pwa ye: at. in: 1963年12月，pp. 317.

東南アジアの研究は，従来のように，専ら，欧米諸国の文献にのみ依存していた状態から，直接，現地語の資料を対象とする方向へと，変って来つつある。ところで，現地語の資料の内でも，地方出版物は，その存在が地味なため，一般に見落とされる傾向が強い。しかし，東南アジアは，一国の中でも，場所が変われば，住んでいる民族も異なり，話されている言葉も違うのが普通であるから，地方文化を反映するものとして，地方出版物の存在意義は，無視できない。この欄で，非学術的な地方誌を取りあげた理由も，そこにある。

mou: pan: hlwa は，北シャン州チャウメ郡ビルマ文学普及協会が出版している年刊誌である。地方誌とはいっても，執筆者は郡内居住者のみに限られているのではなく，広く外部に開放されているらしく，ウー・テインマウンや，ルードゥ・ウー・フラのように，一流の新聞，雑誌で活躍している著名人の寄稿もみられる。チャウメ町の特集記事は，流石に郷土問題を扱っただけあって，読みごたえがあった。行政的には，シャン州に編入されており，歴史的にも，シャン族藩侯の支配下にあったとはいえ，この町は，古くから，パラウン族によって，その発展が支えられてきた。この町の経済の中心は，茶である。ビルマ茶の大部分は，パラウン族によって栽培されてきたが，チャウメが，茶の売買によって成り立つ市場町である以上，その繁栄は，パラウン族と切り離しては考えられない。

mou: pan: hlwa は，全頁，ビルマ語のみであるが，シャン語，パラウン語等による各民族の特色を生かした記事も，できれば欲しいと思う。私は，昨年，名古屋大学の茶樹起源に関する学術調査団が持ち帰った資料の一つで，タウンジー県ピンラウン郡公安兼行政委員会から1962年に出版された「煙草，茶，うこんの地域栽培並びに販売法報告書」と題するパンフレット（ビルマ文）に目を通す機会を得たが，これも地方出版物の一つとして，特色豊かな内容をもっていた事が，記憶に残っている。現地語資料の蒐集は，今後，ますます重要性をましてくると思うが，首都を中心とした出版物だけでなく，地方出版物にも，関心を払う必要があると思う。　（大野　徹）

МАУН МАУН НЬУН, И.А. ОРЛОВА, Е.В. ПУЗИЦКИЙ, И.М. ТАГУНОВА: *БИРМАНСКИЙ ЯЗЫК* Москва 1963 pp. 122.

ソ連における東南アジア諸語の研究が，最近急速に進展しつつある事は，既に西田龍雄助教授（東南アジア研究第二号「ヨーロッパにおける東南アジア諸言語の研究について」)によって紹介されたが，この度「東洋及びアフリカ諸外国語」(ЯЗЫКИ ЗАРБЕЖНОГО ВОСТОКА И АФРИКИ）シリーズの一環として，待望久しい「ビルマ語」が公にされた。

この本の事は，1964年3月10日付のビルマ字新聞「myanma. alin:」紙上で紹介された事があり，私としても多大の期待をもっていたが，ようやく入手できたのでとりあげる事にした。

本書は，全六章から成り立っており，その構成は次の通りである。1. 序論 2. 音韻論 3. 文字組織 4. 形態論 5. 統辞論 6. 付録。この内，序論に

ビルマ語史と方言に関する簡単な記述があるのは，従来の「入門書」，「概説書」にない新しい行き方として注目される。全体としてきわめて要領よくまとめられており，ビルマ語学習の参考書として，その利用価値は高い。

元来，文法書は，その言語を捕えるための「網」のようなものであるが，その際，網の目の粗密が問題となる。いわゆる入門書，概説書として突込み方が不足なのは止むを得ないが，文法書としての本書の網の目が粗い点には，やはり不満が残る。この事は，特に4と5について言い得る。

又，ビルマ語史の説明で mye<土>pye: <走る>に対する古代語形として，夫々 mle, ple という例が挙げられているが，十二，三世紀頃の碑文には mliy, pliy という形が残されているのであるから，それを掲げるべきであろう。

音韻論は，Robert Jones, William Cornyn, R.I. Mcdavid 等アメリカの学者の「音素体系」とは幾分異なっており，J.A. Stewart, R.K. Sprigg 等英国の学者の体系に近い。この点では，私達の感じともよく合う。

ビルマ語は，多音節語の場合，先行音節の末尾音が有声音であれば，次続音節の語頭子音が有声化し，声門閉鎖音であれば無声化するのが原則であるが，例文中，相当の混乱が目につくのは遺憾である。Allophoneや，Allomorpheの概念が曖昧なためであろう。十七頁にある子音の内，ɵ は θ の allo-phone として取扱うのが妥当と思う。

巻末の文献目録は，役に立つ。但し，日本語による唯一の参考書として，五十嵐智昭「ビルマ語文法」がとりあげられているけれども，これは Judson「A Grammar of the Bnrmese Ianguage」の翻訳にすぎず，独創性や実用価値の点からいえば，原田正春「ビルマ語入門」1958の方が，はるかに優れている。

（大野　徹）

S.V. Nievyerob, U: Maun Maun jɔ *myan ma-ru.ša*: *zaga*: *Pyɔ*: *Saou*? Moscow 1961 pp.327.

本書は，はしがきにおいて著者が述べているように「ロシア語を知らないビルマ人がソ連を訪れる場合に使ってもらう」事を意図して作成されたポケット版のロシア語日常会話書である。

始めに，ロシア文字とその発音の説明があり，次いで本論となっている。本論は，一般編と具体編とに大別され，前者には，挨拶，感謝，要求，同意，拒否，失望等14の簡単な表現の型と，気候，月日，時間，数，金銭，色等に関する単語が例示されており，後者には，1. 市中 2. 交通 3. 買物 4. 娯楽 5. 治療 6. 工場 7. 集団農場 8. 保養 9. スポーツ 10. 新聞雑誌 11. ラジオ・テレビ 12. 税関というように，実際の場において話されると想像される会話の例が掲げられている。

これだけ見れば，一応便利な，会話書として有益な本だという印象を受けるが，現実にその利用価値がどの程度あるのかは疑わしい。いわゆる「二言語対訳」会話書の欠陥が，この本にもはっきりと表われていて，いかなる外国語を学ぶ場合にも，初心者にとっての速成法はあり得ないという事を感じさせる。しかし，この本も使いようによっては，その価値を充分に発揮し得る。例えば，Native Speaker の指導，或いは，テープレコーダーの利用等によって反復練習を重ねるならば，相当な効果を期待する事ができるし，又，ロシア語の基礎を一通り学んだ後で用いるとすれば，その実用的価値が一層高まる事は疑いない。

ポケット版会話書として止むを得ないとは思うが，発音の説明にビルマ文字が用いられている事は感心できない。元来，ビルマ語とは音韻体系の異なるロシア語を，ビルマ文字で表記する事自体が，既に無理である。そのため，ビルマ語にはない音を表わすのに相当苦労したらしい跡が認められる。例えば，ロシア文字 ц に対するビルマ文字 ta-sɛ の二文字重ね表記等。且て私は，どうしても日本語のツを発音できないビルマ人に，ビルマ文字 ta-su 二文字の Super-script を用いて説明した経験がある。ビルマ語では，二音節語の第一音節の母音が中舌母音 [ə] に変る傾向が強く，極端な場合には，母音が脱落して了う事さえある。この事から，ロシア文字 ц に対するビルマ文字 ta-sɛ の super-script は，効果的と言えよう。

（大野　徹）